

【関連年表】

- 一九六七年 誕生
- 一九七五年 大口市立大口小学校に転入。
- 一九八八年 「楓パープル」で漫画家としてデビュー。
- 一九九〇年 「週刊少年ジャンプ」(集英社)で「SLAM DUNK」連載開始。
- 一九九六年 「SLAM DUNK」連載終了。
- 一九九八年 「週刊モーニング」(講談社)で「バガボンド」の連載開始。
- 一九九九年 「週刊ヤングジャンプ」(集英社)で「リアル」の連載開始。
- 二〇〇八年～二〇一〇年 東京、熊本、大阪、仙台の四都市で、「井上雄彦最後のマンガ展」を開催。

## たどりつくために

井上雄彦  
たけひこ

バスケットに青春を賭けた、その熱き高校生達の物語は、読者の心を掴んで離しませんでした。「週刊少年ジャンプ」に一九九〇年(平成二年)から六年間連載され、国内で累計一億二千万部以上を売り上げた「SLAM DUNK」は、日本漫画界の最高傑作の一つです。その作者である井上雄彦さんが、高校生までを鹿児島で過ごしていたことを、皆さんは知っているでしょうか。

一九六七年(昭和四十二年)生まれの井上さんは、八歳の時に、鹿児島にある祖父の実家に引っ越すことになり、大口市(現在の伊佐市大口)の大口小学校へ転入し

二〇一〇年現在。

【主な受賞歴】

「かえりて楓パープル」

・第三十五回手塚賞入選

「SLAM DUNK」

・第四十回小学館漫画賞

「バガボンド」

・第四回文化庁メディア芸術祭大賞

・第二十四回講談社漫画賞

・第六回手塚治虫文化賞マンガ大賞

「リアル」

・第五回文化庁メディア芸術祭優秀賞

「井上雄彦 最後のマンガ展」

・第五十九回芸術選奨文部科学大臣

新人賞（メディア芸術部門）

ます。

鹿児島で過ごしていた頃の思い出、そして、鹿児島を離れてから見えてきた鹿児島の魅力みりよくについて、井上さんは、次のように語ってくれました。

「自然のふところに抱かれる感覚が、印象深い思い出として、身体に残っています。川で泳いだこと、山に分け入り歩いたこと。冬の夜、満天の星を見上げたこと。

あと、生き物。川の魚、沢蟹がにやザリガニ。カエル、蛇へび、トカゲ。クワガタ、カブトムシ、カナブン、スズメバチ。カマキリ、バッタ、油蝉ぜみ。そうした生き物たちを、今よりもっと、ありのままに見ていた気がします。今は触れふるのに躊躇ちゅうちよ踏ちよしますが、昔は平気でした。

鹿児島に行くと感じるのは、豊かだなあとということですね。お金のあるなしに由来するものではなく、自然から惜しみなく与えられる資源の豊かなことに、感動すら覚

えます。僕にとっては、温泉がその最たるもの。泉質、湯量ともに、鹿児島島の温泉は最高です。」

井上さんは、小学校と中学校では剣道部に入りましたが、この頃から既に、絵を描くことが大好きな少年でもありました。井上さんの中で、自分が将来絵を描く仕事につくことは、とても自然な道に思っていたと言います。

高校時代はバスケット部に所属し、主将も務めた井上さんは、やがて、絵を描く他のどの仕事よりも「身近に感じられた」漫画家としての道を目指すようになりました。

大学入学後も独学で漫画を勉強し、一九八八年（昭和六十三年）に投稿作品が手塚賞に入選した井上さんは、二十一歳で念願の漫画家としてのデビューを果たします。



【手塚賞】

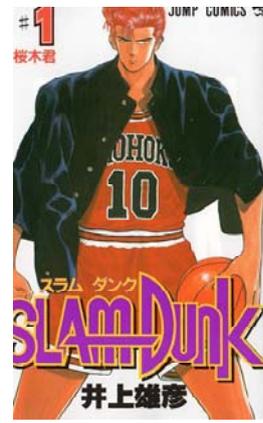
集英社が主催する、少年向けストーリー漫画の新人賞。

一九七一年（昭和四六年）から始まり、年二回行われている。

【考えてみよう】

今の自分が、将来「やってみたい」と思っている仕事について、考えてみよう。

【主な作品介绍】  
「SLAM DUNK」



湘南高校バスケット部に入学した主人公・桜木花道の成長を、仲間やライバル達との様々な物語とあわせて描く。

(・井上雄彦 I.T.Planning, Inc.)

高校時代から「絶対にバスケットを描こう」と決めていた井上さんが、デビュー二年後の二十三歳で連載を開始した「SLAM DUNK」は、「バスケット漫画はヒットしない」という当時の漫画界の俗説を覆<sup>くつがえ</sup>して爆発的なヒットを記録し、バスケットボール人気の火付け役ともなりました。連載終了後の二〇〇六年（平成十八年）には、文化庁「日本のメディア芸術一〇〇選」の漫画部門一位にも選出されています。

さらに井上さんは、「SLAM DUNK」の国内発行部数が一億部を突破<sup>とっば</sup>した二〇〇四年（平成十六年）、プロのバスケットボール選手を目指す高校生のアメリカ留学を支援する「スラムダンク奨学金<sup>しょうがくしん</sup>」を設立しました。二〇一〇年（平成二十二年）現在で、三期四名がアメリカ留学を果たし、プロバスケットボール選手も輩出<sup>はいしゅつ</sup>しているこの取組について、井上さんは、

「バスケットとの出会いがあったから、漫画に描く題材を得られ、その後の漫画家としての機会に恵まれました。そのことへの感謝とお返しとして、こういう形をとりました。」

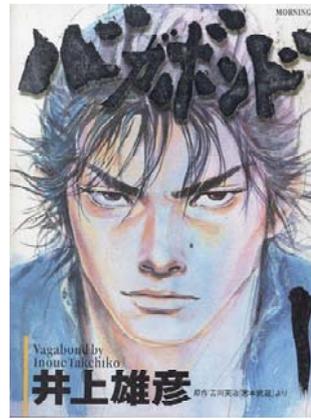
奨学生達には、そこで得られたことを糧かてに、大学進学や、その先の展開を掴つかみ取って欲しいと思っています。また、いずれはその経験を、どんな形であれ、日本のバスケットへと還元してくれたら嬉しいですよ。」と話してくれました。

このようなバスケットボールへの情熱と貢献こうけんにより、井上さんは、二〇一〇年（平成二十二年）、日本バスケットボール協会から特別表ひょうしょう彰しょうを受けています。

「SLAM DUNK」の連載を終えた井上さんは、新たに一九九八年（平成十年）から、実在の剣豪けんごう・宮本



【主な作品紹介】  
「バガボンド」



(・I.T.Planning, Inc.)

吉川英治の小説を原作に、多くの  
剣豪との出会いを重ねる剣士・宮本  
武蔵の放浪の旅を描く。

武蔵を描いた「バガボンド」の連載を開始します。

この、「SLAM DUNK」とは好対照の世界で、「生」と「死」を見つめ、「強さとは何か」を問いかける作品は、連載開始時から読者の圧倒的な支持を受け、漫画家・井上雄彦の評価を不動のものとなりました。

これらの作品を作る際に苦労していること、そして、それらを乗り越えるために努力していることについて井上さんに尋ねたところ、次のように答えてくれました。

「十年描き続けている登場人物を、初めて知る人物のように、興味を持ち、魅力を発見し、紙に描き出すことが、いつも目指していることです。そう出来る状態に、自分をどうやってもって行くか。考えているのは、そういうことです。

自分をゼロの状態に近づけるために、余計な知識や情報や、過去の自分が作ったさまざまなものから距離を置

【主な作品紹介】  
「リアル」



車椅子バスケットをテーマに、挫折と挑戦を繰り返す、三人の若者の日常を描く。

くことは大切です。身体も、ゼロの状態に近づくほど直感を信じていることができるので、常に身体への意識を持っていたい。

具体的に何をしているかと言えば、歩く、バスケのシュート練習、なるべく玄米と野菜を中心に食べ、酒、肉はほどほどに。そんな程度です。

心がけているのは、楽しくやること。気分良く過ごすことを、もっと優先したいと思っています。」

プロの漫画家として連載を持つことは、決して簡単なことではなく、想像を絶する集中力が要求されます。それを、休載を挟みながらも十年以上にわたって、かつ、極めて高いレベルで達成している井上さんは、日本の漫画界でも希有な存在の一人です。

そんな井上さんは、テレビのインタビューで、「プロ



【井上雄彦氏】

フェッショナルとは何か」と問われ、

「向上し続ける人。これが無くなれば、（自分は）プロを辞めなければいけないと思っている。だから、プロとは、向上し続ける人。」と答えています。

自らの役割と作品に対する、彼の揺るぎない信念が伝わってくる一言です。

最後に、井上さんから、鹿児島の中学生の皆さんへ贈られたメッセージを紹介します。

「僕にとって、鹿児島で子供時代を過ごしたことへの感謝の気持ちは、大きくなるばかりです。

与えられた自然は大きくて強いので、人間はその恵みを、あつて当たり前前のものと考え、ねじ伏せるようなこともしてきました。その結果、失って初めて大切なものだったと知る、そんなサイクルを、今の中学生は見て知



【井上文庫】

一九九四年（平成六年）、井上さんが故郷である大口市（現伊佐市）に行った寄付を基に、六百六十七冊の本が購入され、伊佐市立大口図書館に「井上文庫」が設けられた。



っていると思います。

そこから学ぶことがあります。自然とのつながりの経験こそが、心の中にある、帰るべき場所。

たくさん遊びましょう。そして、人間という存在もまた、木や葉っぱや生き物と同じ、自然の要素の一つです。木や葉っぱや生き物のように、与えられた命を生ききりましょう。」

【考えてみよう】

井上さんの言う、「命を生ききる」の意味を考えてみよう。

---

---